様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月　４ 日現在

機関番号：３５３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０４８６８

研究課題名（和文）「中一ギャップ」現象と小中学校間の連携・接続に関する研究

研究課題名（英文）Critical Reflection on the Phenomenon of the'Chuichi Gap'and Problems in School Transition/Collaboration between Elementary Schools and Junior High Schools

研究代表者
毛利　猛（MOURI, Takeshi）

山陽学園大学・総合人間学部・教授

研究者番号：５０２１９９６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、第１に、物語論（ナラティブ・アプローチ）の立場から、異なる「学校文化」間の移行と中学校生活への適応に関する問題について考察した。中学生は、その中学校生活の只中において始まり（入学）と終わり（卒業）を見通しており、そうした時間的展望の中で、そのつど「私の中学校時代」という物語を筋立てている。この物語を「成長の物語」にするために何が必要なのかを明らかにした。
第２に、大学生を対象に実施した「思い出の中の「小中連携」に関する調査」を手がかりに、「中一ギャップ」現象の背後にあるとされる「進学不安」が、ある種の「予期不安」に過ぎないことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
実効性のある小中連携は、適応上の困難を抱えた少数の子どもへの支援と、平均的な多数の子どもたちへの取り組みの「両にらみ」にならざるをえない。どちらの取り組みに重点を置くべきかについては、対象となる子どもの問題や、それぞれの中学校区の教育の課題によって変わってくる。
その上で、学校における働き方改革の時代には、適応上の問題を抱えた子どもへの（ギャップをなくす方向での）援助の仕方を、平均的な多数の子どもたちにそのまま当てはめることなく、教師のエフォートを適正に配分しつつ、社会性を育成するための「学校ならでは」の地道な取り組みを続けていく必要があることを提言した。

研究成果の概要（英文）：First, from the standpoint of a narrative approach, this study examines issues related to the transition between different "school cultures" and adaptation to middle school life. In the midst of their junior high school life, junior high school students anticipate the beginning (entrance into school) and the end (graduation), and in this temporal perspective, they formulate a narrative of "my junior high school days" at each moment. In order to make this story a "story of growth," we clarified what is necessary.
Second, using a survey of university students on their memories of elementary and junior high school cooperation, I clarified that the "anxiety about going on to school" that is said to be behind the "first-secondary-school gap (Chuichi Gap)" phenomenon is nothing more than a kind of "anticipatory anxiety.

研究分野：社会科学

キーワード：中一ギャップ　小中連携　物語論　学校文化　教員の働き方改革

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、「中一ギャップ」という言葉で、小学校 6 年生から中学校 1 年生への移行段階における、子どもたちの中学校生活への適応の難しさが強調され、これに対応する小中連携、一貫教育の取り組みが求められている。この新しい環境への適応の問題は、教育関係者の間では、かなり前から憂慮されていた問題であるが、これが「中一ギャップ」と命名されたことで、早急に対応すべき教育「問題」として、ますます注目されるようになってきた。

それにしても、なぜ、今さらながらに「中一ギャップ」という現象が取り沙汰され、これに対処するために小中連携、一貫教育の必要性が叫ばれているのか。中学校に入学した際の、新しい環境への適応の問題は、その程度の差はともかくとして昔からあったはずである。いわゆる「中一ギャップ」現象が注目されるようになったのは、小学校と中学校の間に大きな段差（障壁）が存在するからというより、むしろ、それを乗り越えていく「たくましさ」が、現代っ子たちのなかに育っていないからである、という見方もできる。「中一ギャップ」という現象については、実際に起こっていることとその「語られ方」を、現代の学校における「心理学的な眼差し」の強まりとも関連させながら、できるだけ多角的、複合的に分析する必要がある。

その上で、実際に効果をあげている小中連携、一貫教育の取り組みが、「ギャップ」の捉え方の二重性（これを取り除くべき「障壁」と捉えるのか「成長の弾み」と捉えるのか）に応じて、一方では、小中学校間の移行に伴う衝撃（ショック）を和らげる方向で援助しつつ、他方では、その衝撃を「成長の弾み」に変えていくという、言うなれば「両にらみ」の取り組みにならざるを得ないことを、大学生への回想調査と小中連携、一貫教育に取り組んでいる事例校への継続的な研究取材によって明らかにするものである。とくにギャップを乗り越える「たくましさ」を育てようとする「学校ならでは」の地道な実践に学問的な光を当てることは、重要な課題であると考える。

２．研究の目的

小学校 6 年生から中学校 1 年生への移行段階における、子どもたちの新しい環境への適応の問題が「中一ギャップ」という言葉で強調され、これに対応する小中学校の連携した取り組みが求められるようになって久しい。

本研究は、「中一ギャップ」の実態と「語られ方」の分析を踏まえつつ、「ギャップ」の捉え方の二重性（なくすべき障壁と捉えるか「成長の弾み」と捉えるか）に応じて、実際に効果をあげている小中連携、一貫教育が、困難を抱えた少数のこどもと平均的な多数の子どもたちとで、重点の置き方を柔軟に変えていく「両にらみ」の取り組みにならざるを得ないことを理論的および実証的に明らかにするものである。

ギャップの捉え方	対象となる子ども	重点的な取り組み
取り除くべき「障壁」「段差」	適応上の困難を抱えた少数の子ども	小中学校間の移行に伴う衝撃（ショック）を和らげる方向での援助
「成長の弾み」	平均的な多数の子どもたち	社会性やコミュニケーション能力を育成するための「学校ならでは」の取り組み

３．研究の方法

(1) 中学生は「私の中学校時代」という物語を生きており、中学校はその物語の舞台であるという物語論（ナラティブ・アプローチ）の立場から、異なる「学校文化」間の移行と中学校生活への適応に関する問題を考察する。

(2) 大学生を対象に実施する回想調査（「思い出の中の「小中連携」に関する調査」）によって、「中一ギャップ」現象の背後にあるとされる「進学不安」が、ある種の「予期不安」に過ぎないことを明らかにする。

(3) ポストコロナの時代、学校における働き方改革の時代に、ギャップを乗り越える社会性や「たくましさ」を育成する「学校ならでは」の取り組みの意義について、とくに典型的な日本型学校教育の実践である「学級づくり」と特別活動を取り上げながら理論的に考察する。

４．研究成果

本研究では、第一に、物語論（ナラティブ・アプローチ）の立場から、異なる「学校文化」間の移行と中学校生活への適応に関する問題について考察した。中学生は、その中学校生活の只中において始まり（入学）と終わり（卒業）を見通しており、そうした時間的展望の中で、そのつど「私の中学校時代」という物語を筋立てている。中学生が中学生であるのは、彼らが「私の中学校時代」という物語を自分に対して語り続けているからである。この「私の中学校時代」という物語を「成長の物語」にするためには、様々な登場人物との出会いと豊かな交流、何らかの困

難な課題への挑戦と「つまずき」体験のとらえ直しが必要である。生徒の一人ひとりが「私の中学校時代」という物語を生きており、このかけがえのない物語を「成長の物語」にするための視点を教育者が共有することの意義について、物語論的に考察した。

第二に、大学生を対象に実施した「思い出の中の「小中連携」に関する調査」を手がかりに、「中一ギャップ」現象の背後にあるとされる「進学不安」が、ある種の「予期不安」に過ぎないことを明らかにした。大学で学ぶ学生たちは、中学校入学を控えた小学校6年生のとき、新しい中学校生活にどのような不安や心配事をもっていたのか、また、中学校入学後にその不安や心配事はどうなったのか。そのことは、彼らが進学した中学校区のなかでメジャー（多数派）またはマイナー（少数派）の小学校出身であることや、彼らが通った小学校と中学校の「小中連携」の取組みとどのように関係しているのか。さらに、彼らは「中一ギャップ」という現象についてどのように考えているのか。これらに関する学生たちの意識を明らかにするための回想調査を実施した。

調査に協力した大学生たちは、小学校から中学校への移行期を「つまずく」ことなく乗り切ったか、あるいは「つまずいた」としても、過去の「つまずき体験」を回想の中で意味あるものに捉え直していると考えてよい。彼らは、「平均的な多数の子どもたち」であったか、または「適応上の困難を抱えた子ども」であったとしても、その困難を克服できた者として回答しているのである。だから、彼らの回答には、ある種のバイアスがかかっていると言えようが、それは、子どもに対して誰かれかまわず過敏な眼差しを向け、その眼差しの中でますます「脆弱に」なった子どもへの配慮を要請する、現代の学校における「心理主義的なバイアス」と比べると、極めて「健康なバイアス」である。

確かに、一方では、小学校から中学校への移行期において、「気をつけて」見てやらなければならない子どもがいる。中学校に進学してから急増しているように見える適応上の問題も、実は、小学校段階で何らかの予兆が見えていることが多い。だからこそ、適応上の問題を抱えている子どもについての、小中学校の間での情報交換と緊密な連携体制が求められているのである。しかし、適応上の問題を抱えた子どもへの（移行に伴う衝撃を和らげる方向での）援助の仕方を、そのまま平均的な多数の子どもたちに対して当てはめてはならない。平均的な多数の子どもたちに必要なのは、むしろ、二つの学校文化の間の移行において、小学校での社会化と中学校で再社会化を、きっちりやり遂げさせてやることである。それぞれの学校文化のなかで、社会性や「たくましさ」の育成に関わる「学校ならでは」の経験をしっかり積ませてやることである。

新型コロナウィルス禍は、一方では、学校のデジタルトランスフォーメーション、ＩCT 活用を加速させることになったが、他方では同時に、子どもたちが学校に通うことの有難さ、学校で学級の仲間や異年齢の仲間とつながることの重要性を浮かび上がらせることになった。

ポストコロナの時代、学校における働き方改革の時代には、「学級づくり」や特別活動などの日本型学校教育の強みを損なうことなく、なおかつこれを無理なく継承していくことが求められている。

適応上の困難を抱えた少数の子どもへの支援と、平均的な多数の子どもたちへの「学校ならでは」の取り組み。「両にらみ」の取り組みのうち、どちらに重点を置くべきかについては、対象となる子どもの問題や、それぞれの中学校区の教育の課題によって変わってこざるをえない。学校における働き方改革の時代には、多忙化している教師をさらに追い詰めることなく、彼らのエフォートを適正に配分しつつ、社会性や「たくましさ」を育成するための「学校ならでは」の地道な取り組みを続けていく必要があることを提言した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 毛利猛	４．巻 第28号
２．論文標題 持続可能性に向けての教育を考える	５．発行年 2023年
３．雑誌名 教育学研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 99－102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 毛利　猛	４．巻 87
２．論文標題 少子化の中の教員養成と教育学－教員養成系大学・学部の挑戦	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教育学研究	６．最初と最後の頁 203-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 毛利　猛	４．巻 44
２．論文標題 「中一ギャップ」現象と両にらみの小中連携－思い出のなかの「小中連携」に関する調査を手がかりにー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 関西教育学会年報	６．最初と最後の頁 160-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 毛利　猛	４．巻 84
２．論文標題 図書紹介　府川源一郎著『「ウサギとカメ」の読書文化史』	５．発行年 2017年
３．雑誌名 教育学研究	６．最初と最後の頁 334-335
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 毛利　猛
2．発表標題 「中一ギャップ」現象と両にらみの小中連携―思い出の中の「小中連携」に関する調査を手がかりに
3．学会等名 関西教育学会第71回大会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

1．著者名 山本木ノ実、植田和也ほか編（毛利猛分担執筆）	4．発行年 2020年
2．出版社 美巧社	5．総ページ数 163
3．書名 子どもたちが育つ学級経営～安心な居場所づくりのために～	

1．著者名 竹森元彦、伊藤裕康、毛利猛他	4．発行年 2018年
2．出版社 美巧社	5．総ページ数 134
3．書名 ナラティヴ・エデュケーションへの扉を拓く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関